

ウィークリー・ブレッド・オブ・ライフ

(2026年1月12日(月)~18日(日))

岸和田聖書教会

牧師 栗原純人

今週も民数記を読み進めます。

1月12日(月)

今日の聖書日課：民数記 7:24~41

二日目にはイッサカルの族長、ツアルの子ネタンエルが献げた。彼は、ささげ物として聖所のシェケルで重さ 130 シェケルの銀の皿一枚、70 シェケルの銀の鉢一つを献げた。この二つには穀物のささげ物として、油を混ぜた小麦粉がいっぱいに入れてあった。

民数記 7:19

これは、昨日の聖書日課にある節。一日目はユダの族長ナフションが祭壇奉獻のためのささげ物をしました。その内容は、冒頭の聖句とまったくいっしょ。そして今日の聖書日課は三日目から五日目までにそれぞれの族長が献げた祭壇奉獻のささげ物が述べられています。なんと単調な！と思います。二日目から 12 日目まで、みんな同じささげ物をした、ではだめなのでしょうか？耳をすましてみましょう。目をこらしてみましょう。これらは「祭壇奉獻のささげ物について」ではなく、「族長たちが献げた」ことが描かれているのです。

一日に一部族。主は一日、一日、やって来る族長たちのささげ物を集中して受けられたのです。

1月13日(火)

今日の聖書日課：民数記 7:42~65

七日目は、エフライム族の族長、アミフデの子エリシャマ。

民数記 7:43

12 部族の族長が一日、ひとり主の前に出てきて祭壇奉獻のささげ物をしました。この順番は無計画ではありませんでした。ユダから始まる 12 部族のささげ物。この順序はすべて会見の天幕を中心に東側に宿営する三部族、南側に宿営する三部族、西側に宿営する三部族、北側に宿営する三部族。2 章の順番のとおりです。七日目、冒頭の聖句。これは南側に宿営する三部族のはじめエフライム族のささげ物です。族長エリシャマはこれまで六日間、待っていました。自分の番が来るのを待ち望んでいました。そうして、自分の番が来て、主の前に出て行つたのです。

書かれているのは同じこと。しかし、族長ひとりひとりの気持ちをイメージしましょう。その高揚感をその達成感を。喜びを、感謝を。私たちはひとりひとり、今日を生きてています。

1月14日(水) 本日は祈祷会です。宣教の祈りを獻げましょう。和歌山聖書のために。

今日の聖書日課：民数記 7:66~89

以上が、祭壇に油注ぎが行われた日に、イスラエルの族長たちから献げられた、祭壇奉獻のささげ物であった。すなわち、銀の皿 12、銀の鉢 12、金のひしゃく 12、

民数記 7:84

ついに 12 部族すべての族長たちが祭壇奉獻のささげ物をし終えました。冒頭の聖句は、これらのまとめの文。すべてのささげ物 × 12 の数が記されています。これらが主のもとに献げられました。しかし、これらが一日のうちにすべて献げられたのではなく、一日一部族、族長ひとりひとりが主の前に出て献げたことを忘れません。

献げられた物は用いられます。しかし主は、献げられたその行為そのものを尊いもの、喜ばしい

出来事として一日一日すごされました。

1月 15 日 (木)

今日の聖書日課：民数記 8：1～26

これはレビ人に関わることである。25 歳以上の者は、会見の天幕の奉仕の務めを果たさなければならない。しかし 50 歳からは奉仕の務めから退き、もう奉仕してはならない。

民数記 8：24

8 章は主にレビ人の任職について述べられています。レビ人は、イスラエルのすべての長子の代わりに主に仕える礼拝のための奉仕者。「イスラエルの子らからの奉獻物」(11)と言われています。人をモノ扱いしているのではなく、尊い働きであることを示しています。

ところで 4 章ではレビ人が奉仕するのは 30～50 歳までの期間と定められていましたが、ここでは 25～50 歳となっています。どうしてなのか、理由は書かれていません。しかし考えられることは 25 歳からレビ人として奉仕するための準備がなされていたのではないか、ということ。5 年かけて教えられた者たちが 30 歳で奉仕を始めるのです。

「50 歳からは奉仕の務めを退き、もう奉仕してはならない。」なにか、さびしい気もしますが、そんなことはありません。一線を退いても、後進の指導に当たるという務め、役割があります。私たちも、中心的に奉仕する人、祈りをもって支える人がいて、教会は前進するのです。

1月 16 日 (金)

今日の聖書日課：民数記 9：1～23

そのたちは彼に言った。「私たちは、人の死体によって汚れていますが、なぜ、イスラエルの子らの中で、定められた時に主へのささげ物を献げることを禁じられているのでしょうか。」

民数記 9：7

9 章の前半は過越の祭り。そのささげ物についての教え。ちょうど一年前の 1 月 14 日にイスラエルは「過越」を経験しました。祭りとしては初めてのこと。このとき「人の死体によって汚れていて、その日に過越のいけにえを献げることができなかつた人たちがいた」のです (6)。彼らは、「しようがない」とは考えず、「モーセとアロンの前に進み出て」、冒頭の聖句のごとく語りました。献げたい、礼拝したい。彼らの強い願いでした。一年前のあの過越。主の力とあわれみを思い起こして彼らは立ち上がったのです。その結果、彼らは 1 月 14 日ではなく 2 月 14 日、一ヶ月後に過越のささげ物をすることになりました。

主はどんなに喜ばれたことしょうか？

1月 17 日 (土)

今日の聖書日課：民数記 10：1～10

また、あなたがたの喜びの日、あなたがたの例祭と新月の日に、自分たちの全焼のささげ物と交わりのいけにえの上にラッパを吹き鳴らすなら、あなたがたは自分たちの神の前に覚えられる。わたしはあなたがたの神、主である。」

民数記 10：10

ラッパを吹き鳴らす。主が聞いてくださる。そして覚えてくださる。戦いにともにいてくださるのです。

1月 18 日 (日)

今日の礼拝説教箇所：民数記 10：29～32

「一緒に行きましょう」

誰が誰に言っているのでしょうか？